

あたたかな雪

愛知県 宇野 陽香

私には好きな絵がある。祖父母の家の玄関に上がってすぐ、横手の壁にそっと飾られた絵。ともすると気づかずに通り過ぎてしまいたいような、ちいさな色紙の短冊に、滲むような筆致で描かれた雪の杉林。祖母が描いたものだ。

冬の薄曇りの空の下、山々に雪が音も立てずに舞い降りている。山の麓に聳える杉林にも雪は降りかかる。その杉の陰に寄り添うように建つ、ちいさな民家が一軒。木樵の棲まいなのか、ひっそりとしている。

一見、寒々とした景色でいて、そう見えないのは雪のせいだろうか。杉の変わらぬ緑の上に、民家の藁葺きの屋根の上に降り積む雪は、冷たくて重いはずのそれとはちがう。祖母の描く雪には、ほんのりと橙色とも桃色とも言えない、やさしい陰が差している。あたたかな雪、とでも言おうか。空から降りかかる雪は、ふんわりと人をも山をも包み込むかのようなのである。この絵を見ると、いつも心がほんのりとあたたかくなる。

この絵を祖母が描いたのだとはじめて知ったとき、私は少なからず驚いた。裁縫が得意で手先の器用な祖母だが、絵を描く姿は見たことがなかったからだ。

「お祖母ちゃん、絵も描くの？」私が尋ねると、祖母は懐かしそうに絵を見上げ、若い頃はよく描いたんだよと微笑んだ。この雪の絵も、伯父と母がまだ幼い時分に描いたものだという。祖母の父、つまり私の曾祖父は、京都で画描きとして着物の図案の仕事をしていた。その縁で、祖母も早くから絵の先生のもとで画業に励んでいたらしい。それは空襲を避け、京都から三重へ越してきてからも続いた。生徒の中でも祖母は熱心で、特に自然や鳥などの生き物を描くのが好きだった。ところが、そのまま画描きになろうかと考えていた矢先、“お前は下手だからやっつけていけない”という先生の一言を受け、祖母は筆を拭こう。信頼していた師の言葉だけに、若い胸に重かった。“もう二度と絵は描くまい”そう心に決めた祖母は手に職をつけ、美容師として働き始める。その後結婚し、三重から嫁いだ先で美容院を開業してからも、祖母が絵筆を持つことはなかった。それどころではないくらい、お店がよく繁盛して忙しかった。

きっかけはひよんなどころに眠っているものである。当時、動物好きな小学生だった伯父は、給食で使うナプキンに魚の絵を描いてくれるよう祖母にねだった。淡い水色の無地の布地。せがまれた祖母は昔取った杵柄、道具も揃わないままに、分厚い魚類図鑑をめくりつつ、その上にたくさんの魚を描いた。エイにヒラメに、鯛にマンボウ。どの生き物もそれぞれの場所を与えられ、のびのびと心地よさげに、空とも海ともつかぬ青の上をおよ

いでいる。惜しいことに、もう失えてしまったとかで、そのナプキンを目にすることは叶わなかったが、話を聴いた私の胸にはそんな情景が浮かんだ。

伯父のナプキンは、学校で瞬く間に評判になった。ことに担任の先生はいたくその絵を気に入って、祖母が描いたと知ると、家に訪れた際に、「是非また描いてください」と励ました。もう道具も捨ててしまったから、と尻込みする祖母に、その女の先生は画材道具をそっくり用意してくださいと、また描くように、強く勧めてくださいだったのだという。祖母はその話を曾祖父にして、冗談交じりに、昔、絵の先生にあんなに厳しく言われなかったら画描きになっていたかしらね、というようなことを言った。するとそれを聞いた曾祖父は、ほんとうに申し訳なさそうな顔をして、

「てるみちゃん、ほんとうにごめんなあ」と口を切り、当時のいきさつを打ち明けてくれた。というのも実は、曾祖父が絵の先生に頼んで、祖母が絵の道を諦めるよう取り計らったのだった。真相を知ったとき、拍子抜けする思いがした、と祖母は思い出しながら笑った。もう絵を描いてはいけないのだとあんなに思い詰めていたのに、と。娘には厳しい道でつらい思いをさせたくないという、父としての願いだったのかもしれない。飾られた絵は、そのとき描かれた記念の作だったのだ。

祖母のふるさとは、私も何度か訪れたことがある。三重県北部の三重郡、菰野町。母屋に曾祖父のアトリエが隣接していたという家は、いまはない。真っ赤な彼岸花が咲きそろった畦道を歩いてゆくと、少女だった祖母が洗濯をしていた沢池があり、狐に化かされて迷いかけたという山もすぐ側に見えた。早くに母親と死に別れた祖母は、炊事や洗濯を一人で担い、幼い弟のために近所で山羊のもらい乳をし、その足で学校へ通っていた。そんな境遇を思わせない祖母だったから、事情を知った校長先生は驚いたという。あの山の絵の雪を見ると、私は苦労を重ねた祖母の柔らかな笑顔と、周りから祖母をそっと支えてくださった、あたたかな人たちのまなざしを思うのである。